

V. 学習相談と事例

1. 学習相談

- A. コースの選択
- B. コースプログラムの調整
- C. 学習相談を支える姿勢

2. 学習相談事例

- 例1) コース変更：「漢字学習」コースから「漢字ゆっくり」コースへ
- 例2) コース変更：「入門日本語文法文型」コースから「消費生活」コースへ
- 例3) コース変更：「読解の基礎」コースから「就職対応」コースへ
- 例4) プログラム調整：課題が難しすぎる場合：「漢字ゆっくり」コースの例
- 例5) プログラム調整：課題が難しすぎる場合：「入門日本語文法文型」コースの例

1. 学習相談

受講者が学習を円滑に進めていくには、学習開始時や学習過程で自分に合った計画を立てたり、直面する問題を解決したりしながら、学習の改善を図って行かねばなりません。これらの調整を受講者一人で行っていくのはたいへん困難を伴います。受講者の相談相手として、客観的な立場でアドバイスや励ましを行っていくのがスクーリング講師の大きな役割です。

それでは、学習相談はどのような流れの中で行われるのでしょうか。まず、毎回のスクーリングの流れの例を図1でご覧下さい。スクーリングの場では、まず受講者が前回からの何週間かの間、どのように学習を進めてきたかを尋ねることから始まります。受講コースのプログラムや前回に決めた学習が達成されていれば、今回の学習活動に入りますが、そうでなかった場合はその原因を探るための学習相談に入ります。図1に挙げたような事柄が原因として考えられます。

《図1. 毎回の学習相談の流れ例》

●今回までにやることになっていた自学自習はできたか？

・ → できた → 今回の学習活動へ

・ → できなかった → 原因を探る

↓

- ・ 遠隔学習課程の学習方法がわかっていない
- ・ 時間がない → 恒常的なようなら、家庭での学習量を加減する相談へ
- ・ 難しすぎる → 学習活動および遠隔課題の難易度を調節する相談へ
※ あまりにも合わないレベルの場合、退学／コース変更へ
- ・ 自学ができていない → 自学方法がわかっているか
 - ・ わかっている → スクーリングの意味は理解しているか
 - ・ わかっていない → 自学方法を知るための学習活動をする
- ・ スクーリングの意味や位置づけを理解していない → 再度説明するとともに、これを繰り返す人には、自学方法を知るための活動に切り替え、次の学習範囲について同じことを宿題として与えるような形で（半分講師主導で）対応する

原因を探っていただいたうえで、実質的な調整に入っていただきます。ここでは以下の順でご説明します。

- A. コースの選択
- B. コースプログラムの調整
- C. 学習相談を支える姿勢



A. コースの選択

① 各コースのレベルと学習ニーズ

まずは受講者が自分の日本語レベルや学習ニーズに合ったコースを取っているのかというのが、一番の問題です。ここが大きく違っていれば、学習は進みません。遠隔学習課程の開講コースを、講師として頭に入れておいていただく必要があります。どんなコースがあるのか、各々のコースの日本語力の目安等、次の表1にまとめましたので、ご確認ください。一つのコースを修了して続けて遠隔学習課程で学習したいがどのコースがいいか相談を受けた場合の参考としてもご利用いただけます。

《表1. 遠隔学習課程各コース受講に要求される日本語力と目標分野》 (2016年4月現在開講コース)

必要な日本語力	日本語力一般			職訓校受験のためのコース	特化ニーズ対応
	語彙・文法文型	場面別会話	読み書き力		
★ 平仮名の読み書き可で挨拶程度の会話可	「入門日本語文法文型」	生活場面日本語「学校」、「消費生活」、「交通」、「医療」	「漢字学習 (露) (1)~(6)」		「中国語ピンイン学習」
★ ★ 初級の中盤程度、簡単な日常会話は何とか可	「続・入門日本語文法文型A」	「近隣交際会話」	「ゆっくり漢字A/B」	「中卒数学」(数学+面接)	「就職対応」
↓ ★ ★ ★ 初級教科書修了程度で日常会話もほぼ可	「続・入門日本語文法文型B」 「日本語能力試験N2受験準備」	「おしゃべり話題」	「自己表現作文(1)A(2)A」 「漢字学習」 ↓ 「読解の基礎」	「中卒国語」(漢字+面接)	「運転免許学科試験対応」 「ホームヘルパー受講準備」 「日本語能力試験N2受験準備」 「介護職員初任者研修受講準備」

※ 表中、上から下へいくほど要求される日本語のレベルが上がります (一つのレベル枠の中でも下にあるコースの方が上にあるコースより難しい)

② 受講コースの変更

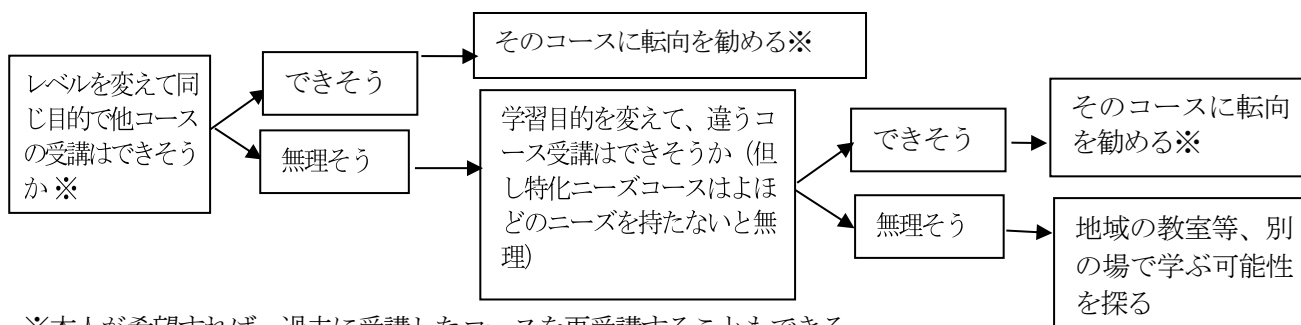
受講してみて、このコースは自分のレベルに合わない、やりたかったことと違うといったずれが明らかになることがあります。また、受講者自身はそのようには訴えないけれども、スクーリング講師がそうと気づくこともあります。そのずれがあまりにも大きい場合は受講を続けることは負担が大きすぎるので、コース変更を考えた方がよいでしょう。中には受講コースが難しすぎると感じているにも拘わらず、やり始めた以上やり続けなければいけないと無理して課題に取り組んでいる受講者の方も少なくありません。センターの担当者とも相談の上、合わないコースをやめることは恥でも何でもないこと、むしろ自分に合ったコースに変えて学習を進めることができた方が有意義であることなどをアドバイスしていただければと思います。

コース変更の際、受講者本人のレベルとニーズはもちろん重要な観点ですが、本人の意志も同等に重要です。本人が納得して学習するのでなければ、せっかくレベルのあったコースに変わっても効果が上がりにく

いでしょう。コース変更はレベルとニーズ、そして本人の意志の三点を考慮し、勧めるようにしてください。

以下に、コース変更などの場合の相談の流れを図2に示してみました。表1と併せてご覧ください。ただし、これはあくまでも例ですので、実際の相談では受講者の気持ちの流れを尊重して話を進めていただければと思います。

《図2. 受講コースが合っていない場合の学習相談の流れ 例》



※本人が希望すれば、過去に受講したコースを再受講することもできる

B. コースプログラムの調整

次に、コース変更までしなくても、課題や学習量の調節で学習を続けられそうな場合の学習相談について考えてみましょう。以下に、①～⑤のような場合について、どのような調整をしたらいいか見てきます。

- ① テキスト・課題が難しすぎる場合
- ② 平仮名が未習の場合
- ③ 全体の学習量が多すぎる場合
- ④ 標準学習期間では、終わりそうにない場合

① テキスト・課題が難しすぎる場合

各コースで想定されたレベルやタイプ以外の受講者には、学習内容や課題が難しすぎる場合もあるでしょう。このような場合は、スクーリングの場で受講者のレベルに応じ、表現や会話を焼き直していただいたり、学習項目を取捨選択していただいたりすることで、受講者個別の達成目標を示すことが必要となります。音声教材の速度についていけない場合も、受講者に合わせた利用方法を工夫して練習をしていただければと思います。音声教材は会話の雰囲気を知るための材料としてお使いいただければいいと思います。学習項目の難度が受講者のレベルに比べ高く、課題をやりきるのが難しいという場合は、受講者と相談しながら、課題の中から受講者が覚えたいと思うものや生活上知っておいてほしいと講師が思うものなどを選び、学習量を調整していただければと思います。その場合、添削者が事情をわかっていないと、再提出するように指示することもありますので、その旨をセンターにご連絡ください。また、受講者が課題で行き詰まったところへのアドバイスはお願いしたいのですが、講師の直しが入りすぎて課題を完璧にして提出してしまうと、センター担当者が受講者の実力を読み間違えることにもなりますので、ご配慮お願いいたします。

② 平仮名が未習の場合

「生活場面日本語」シリーズのコース、「入門日本語文法文型」コースは、日本語のレベルが最も初歩的なコースとなっています。したがってレベルが合わなくてもこれに代わるコースは原則としてありません。しかし、まれに平仮名の読み書き力が受講条件にもかかわらず、平仮名未習得の状態でのこのコースを受講するというケースがあります。受講条件は満たしていませんが、他に日本語学習の場がないという方の場合、何とかこのコースでスクーリングの場を利用して日本語と接触していただく方向でプログラムの微調整を試みていただきたいと思います。

例えば、平仮名未習得の方の場合、変則的ですがプログラムの最初に平仮名を学ぶ時間を加え、その後テキストに進むという方法が考えられます。この場合、平仮名は自学で学び、習得度をスクーリングの際にチェックすることになります。一ヶ月に一回のスクーリングはかなり間隔があいてしましますが、頻度が変えられない場合は、段階的な習得目標を各スクーリングの日に設定して自学を促しながら学習ペース作りをしていただければと思います。但し、自学困難な方の場合は一ヶ月間が空いてしまうとせっかく覚えた事柄を忘れてしまいますので、繰り返し書くだけでいいような宿題を出してあげるとよいでしょう。

③ 全体の学習量が多すぎる場合

職業訓練校入校関係のコースは複数の教材が含まれますが、同時に学習するのは受講者にも大きな負担です。職訓校によっては入校試験科目が少ない場合もありますので、まず実際の受験科目をお確かめください。その上で、さし当たって不要な科目は後回しにする、あるいはコースを選び直して単科のコースに変わる、などの判断をしていただくと受講者の負担を軽減できるかと思います。受験しない受講者なら面接の学習は軽くていいかもしれません。学習プログラムを変更する場合は、前項同様、センターの担当者まで変更内容についてご連絡ください。

④ 標準学習期間では、終わりそうにない場合

「消費生活」コースのスクーリングで「1回のスクーリングで1課ずつ、計6回で半年という予定は無理だから、もう少しゆっくり進めようということに、相談がまとまった」、また、「職業訓練校入校中卒程度国語」コースのスクーリングで「職業訓練校受験のために2年がかりで『漢字を覚えよう上下』を終える予定。具体的な計画を立てていなかったなので、とりあえず一年間の学習計画を立て、更に一年後までにどこまで進むか、目標を定めた」というように、学習期間も受講者のペースや目標に併せて自由に定めることができます。センターで示している標準学習期間は、あくまでも便宜上の目安で、これにとらわれることはありません。最長学習期間として標準学習期間の倍の1年間（「就職対応」、「ホームヘルパー受講準備」、「中国語ピンイン学習」コースは6ヶ月）の学習期間が認められています。学習期間中に課題を提出し、継続の手続きをすれば先の例のように2年計画も立てられます。この自由さを受講者の方が理解されていない場合もあります。講師の方には是非アドバイスしていただきたいポイントです。

但し、学習を継続した場合のスクーリング実施の有無は、地域によって異なることがありますので、スクーリングの実施主体（各自治体、支援・交流センター）にご確認ください。

C. 学習相談を支える姿勢

学習相談に際しては、受講者の学習観や言語観も尊重することが不可欠です。特に高齢学習者の場合、受講者の学習そのものへの意欲を削がないような配慮が必要になります。例えば、ある講師の方から「受講者は正しい発音やアクセント、イントネーションを身につけたいという希望を持っており、講師は直すようにしているが、意味が分からない、あるいは意味を取り違えるほどではないため、あまり厳しく訂正しないようにしている」というご報告をいただきました。受講者の希望に添いつつも意欲と能力のバランスを保とうとされていることが窺えます。

また、高齢者にとっては、新しい項目の学習は本人がいくら努力しても限界があります。そのようなときには学習意欲が維持できるよう、受講者の相談に乗って講師が学習項目の量を調整するなどすると気持ちが楽になると思います。学習の継続を最優先に考えていただくようお願いいたします。

また、別の例で日本語の知識はある程度持っているのに「話したら必ず間違えるからダメだ」と言って絶対に日本語を話そうとしない漢字コースの受講者（三世）への対応を考えた講師から「話すことを拒否し続けたとしても、このコースの学習を着実に続けられれば、読みとる力はあるだろう。本人がこのコース学習をどういう形で自分の将来に役立てていくのか、それに対して支援者は何をしていけばいいのか考えていこうと思う」という報告をいただきました。このように受講者の意向を尊重しつつ、伴走のあり方を考える姿勢こそが、スクーリング講師に求められていることだと思います。

2. 学習相談事例

以下に学習相談の例を五つ紹介します。対応の参考事例として、ご参照ください。

例1) コース変更：「漢字学習」コースから「漢字ゆっくり」コースへ

例2) コース変更：「入門日本語文法文型」コースから「消費生活」コースへ

例3) コース変更：「読解の基礎」コースから「就職対応」コースへ

例4) プログラム調整：課題が難しすぎる場合：「漢字ゆっくり」コースの例

例5) プログラム調整：課題が難しすぎる場合：「入門日本語文法文型」コースの例

例1) コース変更：「漢字学習」コースから「漢字ゆっくり」コースへ

「漢字学習」コースを取っていた受講者Aさんの例をご紹介します。Aさんは日本語での会話はごく簡単なことが話せるレベルの60代の一世代、漢字語彙を増やそうとこのコースを受講し始めましたが、課題は添削で真っ赤になって返却されてきました。しかし、ご本人は次の課題が届くとすぐやっしまわないと気が済まない性格とのことで、またプライドもあり、わからないまま解答して提出してしまうのです。このときは、講師からセンターに相談があり、「漢字ゆっくり」コースを勧め、講師と受講者で相談した結果、コース変更をしました。「漢字ゆっくり」コースは、学習する語彙の数をぐっと減らしたコースです。「漢字学習」コースが難しすぎる受講者の方には「漢字ゆっくり」コースをお勧めください。また、「漢字ゆっくり」コースでも大変な方の場合は、「例4) コースプログラム調整：課題が難しすぎる場合：『漢字ゆっくり』コースの例」をご参照ください。

例2) コース変更：「入門日本語文法文型」コースから「消費生活」コースへ

一番簡単なコースということで「入門日本語文法文型」コースを取り始めたものの、徐々に課が進んでいくと、文法項目も複雑になってきて、ついていけなくなってきたという例も聞きます。「入門日本語文法文型」コースは文法的には積み上げ式のコースですから、徐々に難度は増してきます。また、語彙の積み重ねも出てきます。このように積み上げ式の学習コースが合わない場合は、場面を重視した「生活場面日本語」シリーズを勧めてみるといいかもしれません。場面中心のコースであれば、文法的に徐々に難しくなると言ったことはありませんし、興味のある場面で自分に必要な言葉や表現を学ぶことができ、学習項目の取捨選択もしやすくなります。

あるケースでは、「入門日本語文法文型」コースをとったが、実は受講者は平仮名もおぼつかない状態で、平仮名の補習をしながらテキストの学習も進めていました。しかし、講師の観察からは学習タイプとしては文法積み上げ形式の学習は合わないのではないかと感じる、ということで、センター担当者、スクーリング講師、受講者と相談の上、「消費生活」コースへ変更することになりました。

例3) コース変更：「読解の基礎」コースから「就職対応」コースへ

「読解の基礎」コース受講者の場合、はっきりと「読解力向上」というニーズを持っていることは少なく、

このコースの学習を通して会話力向上を目的と考えている場合がよくあります。しかし、読解のテキストは提示されている語彙が使えるようになることを目指して作られてはいませんし、もともとその語彙自体、日常ではあまり使われない言葉（文章語）が多いです。また、レベル的にも中上級の日本語力を要求される相当難度の高いコースです。ニーズもレベルも合わないまま、このテキストで学習を進めることは負担が大き過ぎるばかりです。このような場合は、再度コースの目的を受講者に説明し、コース変更を勧めた方がよいでしょう。書くことに苦手意識のない方なら「自己表現作文」シリーズのコース、ニーズが日本語力全般であるのなら、レベルに応じて「日本語文法文型」「生活場面日本語」シリーズのコース、「ゆっくり漢字」コースなどが勧められます。

「読解の基礎」コースを受講していたCさん（60代、一世）の例ですが、途中で講師がこのコースは日本語力からみて無理だろうと判断して県担当者に相談しました。県担当者からセンターに連絡があり、その結果、本人のレベルと「日常会話の力を伸ばしたい」というニーズを考慮して「就職対応」コースに移った、というケースです。「就職対応」コースは就職面接のためのコースですので、就職を目的としない人には本来不向きなのですが、Cさんの場合は面接中に交わされる基本的な会話を目的とするということで合意の上で変更した特殊なケースです。

例4) プログラム調整：課題が難しすぎる場合：「漢字ゆっくり」コースの例

「漢字ゆっくり」コースを受講していたEさん（60代、一世）のケースです。中国語の識字に大きな困難があり、テキストを十分に活用できないまま学習をしていました。しかし、帰国後十年近くを経ていて日本語の会話力がある程度あったため、提出課題の中に既知の語彙がいくつかありました。そこで、その知識を生かそうと、既知の語彙をマークしてもらい、それを含む課題文のみの読み書きを練習するよう課題を切り替えました。

Eさんのようなケースでなくても、課題中の語彙全てを学習するのは苦しいという場合があります。そのような場合も、課題中の語彙から更に受講者が覚えたいと思うものや生活上知っておいてほしいと講師の思うものなどを取捨選択する作業を二人で相談しながら行っていただくといいと思います。スクーリングは受講者と講師が話し合っただけで学習量を調整する場と位置づけてください。

また、「漢字ゆっくり」コースでも難しい方のために、「漢字ゆっくり」コースの課題のバリエーションとして、「超ゆっくりプログラム」を準備しています。これは、「漢字ゆっくり」コースの課題を更に問題数を減らしたもので、「漢字ゆっくり」コースでも大変だが漢字の学習は続けたいという方がいらっしゃいましたら、センターまでご相談下さい。

例5) プログラム調整：課題が難しすぎる場合：「入門日本語文法文型」コースの例

「入門日本語文法文型」コースの受講者で文法概念の理解が困難という場合があります。この場合、文法説明を読んで練習問題を解くこと自体が困難ですから、自学自習でコースの学習を進めていくのは難しく、スクーリングで講師の方に手伝っていただくことが不可欠になります。

このようなケースの場合は、正確な理解と習得は達成目標を低くし、文法項目は目標から外し、各課の語彙習得に目標の重点を置いて学習項目を絞り込みます。課題も活用問題や文法を意識したドリルなどは割愛

し、語彙問題中心に絞り混むとよいでしょう。ただ、その場合、添削するセンター側がこの事情をわかっていないと、空欄の箇所を埋めてから再提出してくださいなどと受講者に要求してしまうかもしれません。そこで、課題の取捨選択をしたい場合はその旨をセンターにお伝えください。

なお、課題が難しすぎるため、家族の人に課題を代わりにやってもらってしまう人がいますが、学習はご本人がやらなければ意味がありません。この点については受講者へ注意の喚起をお願いします。

